

<平成28年度学部附属共同研究報告>

学んだ英語を活用し、様々な場面でコミュニケーションを 図ることができる児童・生徒の育成

～楽しむ・協調する・対話を紡ぐ～

アダチ徹子⁽¹⁾・東條弘子⁽²⁾・齋藤 匡⁽³⁾・別府百合亜⁽³⁾
山本延久⁽⁴⁾・坂口瑞穂⁽⁴⁾・園田伊公子⁽⁴⁾

I はじめに

外国語活動・外国語科部会では、これまで以下のようなテーマで研究を進めてきた。

○平成28年度：学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童・生徒の育成～獲得した表現を使い、豊かな会話につなげる～

○平成29年度：学んだ英語を用いて、様々な場面で活用できる児童、生徒の育成～獲得した表現を使い、表現することを楽しむ～

附属小学校・中学校において、児童生徒は熱心に、また楽しく英語を学んでいるが、「覚えたはずなのにいざとなると言葉が出てこない」というもどかしさをたびたび感じているように思われる。教師側も同じことで、「学習した表現が使えるよ」という場面に出くわすことがよくある。「学習した英語≠使える英語」ではないのが、英語学習の難しさの一つでもある。

この「もどかしさ」を少しでも解消し、自分がこれまでに学んだ表現でコミュニケーションできるという自信を児童生徒にもたせるために、近年「学んだ英語を用いて」「活用する」ということに焦点を当てた研究を進めてきた。コミュニケーションの場面や状況の設定を工夫し、児童生徒に「伝え合いたい気持ち」をもたせ、発達段階に応じた「伝える工夫」を積極的に行わせることにより、「通じた」「わかりあえた」という実感をもたせる授業実践を行うことができた。

本年度は、この研究に新学習指導要領で求められている指導内容等に留意して、さらに児童生徒が豊かなコミュニケーションを楽しむことができる授業を実現すべく、研究テーマを「学んだ英語を活用し、様々な場面でコミュニケーションを図ることができる児童・生徒の育成～楽しむ・協調する・対話を紡ぐ～」とした。附属学校・中学校それぞれで行った研究と実践の成果と課題について報告する。

なお、本年度は宮崎県で九州国立大学附属学校連盟の大会や、第66回九州地区英語教育研究大会等が行われ、共同研究メンバーも大会運営、研究発表、指導助言等の協力を行ったことを付記しておく。また、県教委と協力した教員研修を、昨年度は附属小学校で、そして今年度は附属中学校で実施することができた。

⁽¹⁾宮崎大学大学院教育学研究科

⁽²⁾宮崎大学教育学部

⁽³⁾宮崎大学教育学部附属小学校

⁽⁴⁾宮崎大学教育学部附属中学校

II 附属小学校における研究

2.1 研究課題

本校の研究主題「各教科等の特質に応じた学びの本質に迫る授業の創造」を踏まえ、「相手意識をもって伝え合い、互いの思いや考えを共有しようとする子どもの育成」について研究を行った。外国語活動におけるコミュニケーションにおいて、子どもは「話し手」であるだけでなく、「聞き手」でもある。子どもは「話し手」として、相手に分かってもらうために自己を表現しようとしたり、「聞き手」として相手の言葉やその言葉に込められた思い、相手の背景等を受け止めながら聞いたりする。このとき、互いの思いを共有しようとする姿が表れているのではないだろうか。本研究部では、このような姿が表れるコミュニケーションにつながる相手意識とは何か、捉え直す必要性を強く感じている。これまでの研究では、「言いたいことが伝わった!」「相手の言いたいことが分かった!」という達成感を味わえるように工夫してきた。ただ伝え合うのではなく、あえてヒントを与えて連想させることで、互いに相手とかかわろうとする意欲をもたせるなどの工夫をしてきた。子どもは慣れ親しんできた英語を使って、楽しく、積極的にコミュニケーション活動へ参加することができた。しかし、これらは、今後求められる相手意識としては十分ではない。今後は、その単元ならではの互いの思いの共有に至る相手意識が求められている。

外国語科・外国語活動の特質に応じた学びの本質とは何か、互いの思いや考えの共有に至る学びは可能なのか、可能であるなら、思いや考えの共有につながる相手意識とは何かを探っていくために本研究テーマと以下の研究内容を設定し、子どもの姿を基に考察していくことにした。

◆研究内容◆

- (1) 単元における「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の明確化
- (2) 「伝える工夫」や「思いや考え」について思考するための表現づくりの工夫

2.2 研究の実際

「小学校外国語の特質に応じた学びの本質」と「小学校外国語における深い学びとは」に関する考え方を次のように仮定し、研究を行った。

【仮説：小学校外国語の特質に応じた学びの本質とは】

互いのその人らしさや場面の状況を加味しながら、他者とのコミュニケーションに臨み、伝え合える喜びを味わうなかで、自他のよさやコミュニケーションの価値を感じ、自分そのものへの自信を高めていくこと。

そして、これらのコミュニケーションをとおして、その単元ならではの子どもの思いや考え「互いに共有されること」。

【仮説：小学校外国語における深い学びとは】

次の2つの思考が伴う学びのこと

1 伝える工夫についての思考

- ・「伝えたいことを今回の相手に伝えるためには、どんな英語をどうやって使えばいいのかな。」
- ・「〇〇さんは、〇〇を伝えるために、あんな工夫をしているな。」

2 思いや考えについての思考

- ・「伝えたいことに込めた自分の思いや考えを今回の相手に伝えるためには、どんな英語をどうやって使えばいいのかな。」＝「1 伝える工夫についての思考」に思いや考えが含まれたもの
- ・「〇〇さんが伝えたい思いはこれだったのだなあ。〇〇だなあ。」

2.2.1 「外国語によるコミュニケーションの見方・考え方」の明確化

学習指導要領には、次のように書かれている。「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者とのかわりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。」

これを自己紹介の単元における実際の授業場面として捉えると、次の2つの場面となる。

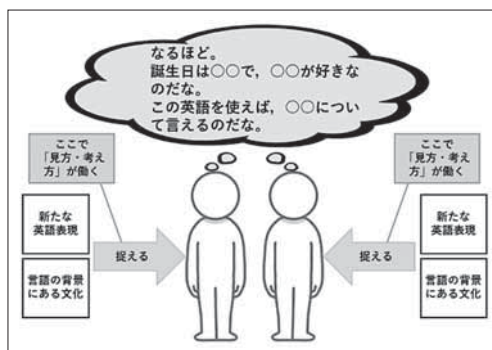


図1 【新たな英語表現に出合う場面】

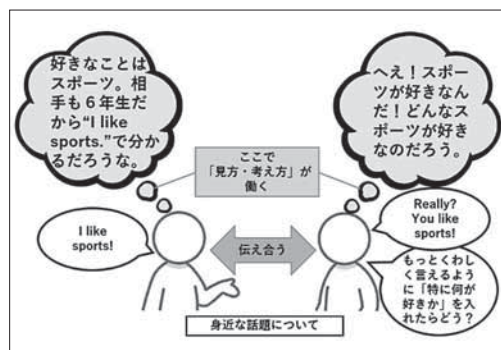


図2 【表現内容をつったり伝え合ったりする場面】

つまり、新たな英語表現に出合う場面と、表現内容をつったり伝え合ったりする場面の2つの場面が考えられる。新たな英語表現に出合う場面においては、見方・考え方がどのように働いているのかを子どもの姿から判断することが難しい。よって、今回の研究では、表現内容をつったり伝え合ったりする場面における「外国語によるコミュニケーションの見方・考え方」を明確にしたうえで、次項2.2.2のように「伝える工夫」や「思いや考え」について思考するための表現づくりの工夫に取り組むことにした。

2.2.2 「伝える工夫」や「思いや考え」について思考するための表現づくりの工夫

各単元において明確にした「外国語によるコミュニケーションの見方・考え方」を実際に働かせる場面として、表現内容づくりの場面を中心に上げる。この表現づくりの場面において、見方・考え方を働かせながら、「伝える工夫」や「思いや考え」についての思考が伴うようにしたい。そして、その後の伝え合う場面においてどのような姿が表れているのかを観察する。

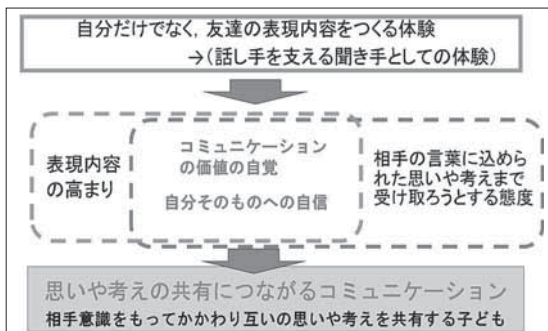


図3 【友だちの表現内容をつくる体験と研究テーマとのつながり】

○ 自分だけでなく、友だちの表現内容をつくる体験の重視

今回の研究では、友だちの表現内容をともに作り上げていく活動を単元の中に位置付ける。この体験の積み重ねにより、表現内容が高まるだけでなく、相手の思いや考えまで受け取ろうとする態度を育てることを意図したからである。子どもは、この両方がある初めて、コミュニケーションの価値を自覚し、自分そのものへの自信をも高めていくと考え、思いや考えを共有する子どもの姿を実現することをねらった。

2.2.3 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の明確化をして見えてきたこと

- 単元ならではの見方・考え方と、どの単元にも共通する見方・考え方があること
- 教師が簡単だと感じる見方・考え方も、子どもにとっては負荷がかかるものであること

2.2.4 「伝える工夫」や「思いや考え」について思考するための表現づくりで必要なこと

- コミュニケーションの目的や場面、状況を明確にすること
- コミュニケーションの流れについては曖昧さをなくすこと
- 必要となる英語の語や語句について、次の2点についての慣れ親しみが十分であること
→「語や語句そのもの」「どの語や語句が適切か」を思考し選んだり並べたりすること
- 本時のめあてに立ち返り、自他の姿についてふりかえる時間を設定すること

2.2.5 思いや考えの共有につながる相手意識をもってかかわる姿として見えてきたもの

- 今話している文だけでなく、次への期待感をもちながら伝え合う雰囲気
- 暗記したもののやり取りではなく、状況に応じた話し手や聞き手の工夫が入りながら会話が継続される姿
- 間をとって話したいことを整理したり、相手が理解しているか確かめたりしながら進む姿
- 頷きや表情、繰り返し、英語“Me too.” “Nice.” “Fight.”等の反応を示す姿

上記のような姿から、「小学校外国語の特質に応じた学びの本質」と「小学校外国語における深い学び」は、仮説で挙げたとおりで概ねよいのではないかと捉えている。

2.3 成果と課題

コミュニケーションの目的や場面、状況を明確にし、見方・考え方を働きやすくすることで、全員が同じ目的をもって取り組むことができ、黒板にない英語を使って相手に伝わるかを試したり、外来語を頼りに英語にしたりするなど、表現内容をつくるときの思考が伴っていた。また、友だちのジェスチャーを真似しながら話を聞いたり、自分の表現に取り入れたりするなど、伝える工夫に目を向けた思考の深まりも見られた。友だちと対話をしたり、一緒に表現内容をつくったりすることが、単元ならではの思いや考えの共有につながっていた。学びの本質や相手意識をもった姿が今の捉えでよいのか、さらに検証する必要がある。今年度から始まった中学年の外国語活動の学びの積み重ねが今後どのような姿につながっていくのか検証していきたい。

Ⅲ 附属中学校における研究

3.1 研究の実際

中学生は、得た情報や自分の考えや気持ちを、外国語をとおして仲間と交換し、共有しながら学びを深めることが求められる。しかし、実際には、単元で学習した表現パターンを中心に行う表現活動に留まっており、既習表現を取り入れた即興的なやりとりが十分に行えていない。この現状を改善すべく「学んだ英語を活用し、様々な場面でコミュニケーションを図ることができる児童・生徒の育成～楽しむ・協調する・対話を紡ぐ～」という共同研究テーマの基に、主として以下の3つの実践を行った。

①発達段階を意識した表現活動と場面設定や教材の工夫

各学年年間目標を定め、段階を踏んだゴールイメージを設定した年間英語活動カリキュラムを見直し、教科書で学んだことを自分で工夫してoutputする機会をたくさんもてるようにした。1年生は、自己紹介や級友紹介等、学習したことをベースにして伝え合った。2年生は、外国人観光客への実際のインタビューをとおして、自分の考えたこと・体験したことを学級で伝え合う活動を行った。3年生は、宮崎大学の外国人留学生を招き、質疑応答を交えながら日本文化を紹介した。これらの実践のように、実際に学習した英語を活用する場面を、図4に示した「宮附3ステップ」を基に計画的に設定することで、各単元・各学年での学びをつなげながら、個人やグループでのパフォーマンスに取り組むことができた。

宮附3ステップ ～つながりのこだわり～

(表現のつながり) (学年のつながり) (評価のつながり)

学年	ステップ	Listening 聞くこと	Speaking 話すこと	Reading 読むこと	Writing 書くこと
学習したことをベースにして、相手に伝える					
1年生	Step1	英語による単語や単語語彙を理解すること 活動の前後「リスニングテスト」	アルファベットや簡単な単語について正しい発音すること 活動の前後	アルファベットや簡単な単語を正しい読み方で読むこと 活動の前後	アルファベットの文字や小文字の書き方から学ぶこと 活動の前後
	Step2	簡単な文の読み取りや単語語彙を理解すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	短い文章を読んで、意味や内容を理解すること 定期テスト、ワークシート	簡単な文章を書くこと 定期テスト、ワークシート
	Step3	簡単な文の読み取りや単語語彙を理解すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	短い文章を読んで、意味や内容を理解すること 定期テスト、ワークシート	簡単な文章を書くこと 定期テスト、ワークシート
自分の考えたこと・体験したことを相手に伝える					
2年生	Step1	自分のことや身近な話題について対話すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート
	Step2	自分のことや身近な話題について対話すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート
	Step3	自分のことや身近な話題について対話すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート
新たな表現を取り入れて、相手に伝える					
3年生	Step1	自分のことや身近な話題について対話すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート
	Step2	自分のことや身近な話題について対話すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート
	Step3	自分のことや身近な話題について対話すること 「リスニングテスト、ワークシート」	自分のことや身近な話題について対話すること スピーキングテスト	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート	自分のことや身近な話題について対話すること 定期テスト、ワークシート

宮附3ステップは「つながる美徳」へこだわり、英語の「つながってほしいのにつながりにくい」美徳をきめ細やかに対策します。

図4【宮附3ステップ】

②会話でふりかえる既習表現

コミュニケーションを紡いでいくための即興性を培うために、基礎的・基本的な表現の定着は欠かせない。また、実際に英語を用いてコミュニケーションをする機会に慣れることが大切である。そこで、授業の帯活動として教科書で学習した表現を使い、友だちとの会話を通してくり返し復習する活動を取り入れた。対話を行うことで、自分だけでなく、相手の良い点や間違いに気づくことができる。また、仲間との関わりから伝え合うためのより良い方法に気づき、普段の会話で意識しながら練習することができるようになった。“Oh, really?” “I have been there too.”といった既習表現を使ったリアクションや、“Why do you～?”等の関連した質問を交えながら対話が自然に行えるようになり、対話の内容が深まったり、話題が広がったりする傾向が見られた。さらに帯活動で練習した表現を含んだスピーキングテスト（ALTとの会話）を行い、評価してもらうことで、生徒は自分の良かった所や苦手な所を知ることができた。そのことが、日々の帯活動に対して、「リアクションの表現を増やす」や「次は、自分から質問をする」等の具体的な目標をもち、挑戦する姿勢へとつながった。

③ 伝え合うバリエーションの工夫

「書くこと」には、伝えたい内容を掲示することで発信でき、多くの人に「読むこと」の機会を与えることができる良さがある。そこで、各学年で、英語で書いて伝え合う活動を取り入れた。1年生は、自己紹介や人物紹介のカードを作成した。2年生は、修学旅行での学びについて見出しをつけながらポスター形式にまとめた。3年生は、日本文化について紹介するパンフレットを作成した。また、ワークシートの中に、相手との対話で得た情報や、教科書本文で扱われている題材に対する自分の考え等を英語で書く欄を設けた。書く活動に入る前には、ペアやグループでの対話練習の時間を十分に設定し、口頭で伝え合う活動を取り入れた。そうすることで、書くことが苦手な生徒も、どの表現を用いれば自分の意見を伝えることができるかが分かるようになり、使用する語彙が増える傾向が見られた。

3.2 成果

それぞれの実践においてはねらった成果を上げることができた。また、年間を通して、生徒たち自身が、学んだ英語がコミュニケーションの中で活用できるという実感がもてる場面を設定することができた。このことが、既習した表現を用いることで対話が続くという経験となり、英語学習への興味関心や英語を使おうとする積極的な態度へとつながった。Can-Do Listの継続活用により、単元間や学年間の学びが関連していることを示すことができ、生徒たちは持続したモチベーションで懸命に活動に取り組む姿が見られた。

3.3 課題

本年度は、「書くこと」の活動も定期的に取り入れてきたが、授業の大半が口頭での英語活動となっており、「書くこと」と「読むこと」の力を定着させる活動が十分ではない。領域のバランスを考えながら、生徒が実際に英語で書いたり、読んだりしてみたい場面を設定する必要がある。今後は、書いてまとめたものを、話しながら伝えるプレゼンテーション活動を各学年の学習内容を考慮しながら取り入れたい。同時に、聞いたり読んだりして感じたこと、考えたことを述べる力を、中学校3ヶ年の英語学習の中で計画的に取り入れていきたい。各領域の総合的な力の育成が、様々な場面でコミュニケーションを図る力の土台となる。本校は、様々な探究活動を各教科で取り組んでいるので、教科連携型の活動にも挑戦できるであろう。そうすることで、「楽しむ・協調する・対話を紡ぐ」ことを実感させながら、学んだ英語を活用し、様々な場面でコミュニケーションを図ることができる生徒の育成によりつながる授業実践ができると考える。